

エッセイ 中東奮闘記—湾岸50年、オイルマンの軌跡

第十二回 オマーンとの新たな交流

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

12-1. 湾岸初の日本庭園 - 日オ友好親善の証

1999年12月中旬、神長駐オマーン日本大使から自宅に、「オマーンに日本庭園を造る計画が進んでいる。オマーン側の組織はすでに立ち上がった。日本側の組織もまもなくできる見込みである。このプロジェクトに協力願えないか」、「来年2月に東京で中近東大使会議があり、私も出席する。詳しくは、その時の歓迎パーティー後にお話ししたい」という電話が入った。オマーンのことなら基本的に協力するスタンスの私は、「私にできることがあれば」と返事をした。

翌年の2000年1月に入って、大使から、「2月18日のホテル・オークラでの中近東大使歓迎パーティーに出席願いたい。その後に相談をしたい」という連絡が入った。

神長大使とは電話では話をしたが、面識はない。緊張しながら、当日ホテル・オークラでのパーティーに出席した。そこで紹介されたトヨタ自動車の駒田課長と二人でパーティー後に大使の話を聞いた。前年にオマーンを訪問したトヨタ自動車社長がプロジェクトへの協力意向を示したので、駒田は会社からそのフォローを仰せつかっていた。

大使の話は、「趣旨は、カブース国王即位30周年記念に象徴的なモニュメントを残すことにある。オマーン人は自然に親しみ文化への造詣が深く、日本庭園に関心がある。この庭園は日オ友好親善の証となるとともに、オマーンの観光にも役立つ。造園場所は、マスカット市近郊のナシーム・マスカット公園の一角、広さは7000平方メートル。予算は6、000万円、日本とオマーンが3000万円ずつを負担する。維持管理はマスカット市が責任を持って行う。設計・技術指導・管理は東京の(株)総合庭園研究室。今年の11月18日のオマーンの日までには完成したい。お二人にこのプロジェクト推進に協力して欲しい。自分も今回の帰国中に、経団連やオマーン関係の企業にコンタクトをする。本件の事務局には外務省を考えている」ということであった。私は、「できることはやらせていただきます」とこれを受諾した。

いざ取り組んでみると、このプロジェクトの推進には、多くの問題点があった。「オマーンの気候で日本庭園プロジェクトが可能か」、「海外での日本庭園は、日本人が多く在住しているサンフランシスコなどを除いてほとんどが失敗している。外国人では、維持管理が難しいからだ」、「庭園の維持管理をオマーン側がやるというが、オマーン人ができるだろうか。将来に亘って日本人専門家の派遣は不要なのか」、「予算6000万円で足りるのか、

即位30周年に当たってカブース国王来日の話もある。その時のパーティーなどの費用も考えておかなければならない。日本庭園と国王来日時での歓迎の両方をやりきれぬのか、「発起人会社をどこにするのか」、「経団連が企業に協力依頼を出すのに必要な日本オマーン協会や外務省は、プロジェクト推進には慎重である」などなどであった。

私は、トヨタの駒田と連絡をとりながら、主に日本オマーン協会との折衝に当たり、経団連や本プロジェクトの窓口になった日本外交協会も含む関係者との打ち合わせにも出席をした。当初、計画の推進に慎重というよりは反対だった日本オマーン協会の姿勢を変更してもらうには苦勞をしたが、最終的には「反対はしない」という言質を得た。外務省課長へも反対しないように手紙を書いた記憶がある。私の活動は、年末近くまで10ヶ月間に亘った。

予定よりは半年ほど遅れたが、この日本庭園は神長大使らの熱意が実り、2001年5月31日に開園した。名前は、「平安日本庭園」。

私が他の用でオマーンを訪問した2000年5月に訪れた時には、現地は一木一草もない更地であったが、2005年1月に訪れてみると、灯籠、重塔、水溪、橋、浮島、篝火、藤棚などが施された日本庭園ができ上っていた。その後、この庭園は現地の新聞や日本のメディアでも紹介された。

また、標高2000メートルを超えるオマーンのジャバル・アフダル（緑の山）の山中には、日本の桜と梨の樹が植えられている。どちらも、大使が在任中に日本から苗木を持ち込んで、オマーンの農林大臣と一緒に2002年2月に植えたものである。桜は、時期になるとピンクの花をつけると仄聞している。

12-2. 熱砂のラクダ競争 - テレビ番組への協力

それは、2001年の3月に入ってすぐのことであった。NHKの帯広放送局の今村ディレクターから突然自宅に電話があった。対応してみると、「NHKでオマーンで『熱砂のラクダレース』という1時間番組を作りたい。協力いただけないか。内容は、シナリオの作成への協力と現地で協力してくれる方の紹介など」ということであった。1995年に拙著「オマーンが見えてくる」が出版されていたことから、私に辿り着いたということであった。日オ関係に役に立つことなら何でもするというスタンスの私は、これを受諾した。

シナリオ作りに関しては、私なりに以下のように今村に書き送った。

ラクダとベドウィンの関係については、「ラクダは砂漠に住むベドウィンの暮らしに欠くべからざるものである。砂漠の船と称されるように移動手段として、ミルクはデザートとともに人々の命をつなぎ、糞は燃料に尿は水分補給や薬として、また毛皮や毛はテントや衣料として使われる。ベドウィンがラクダを食べないのは、ラクダが死ねば彼等も死ぬ以外なかったからである」、「ラクダを駆使して戦うベドウィンは、遠藤流に言えば、日本の武士にも比せられるのではないか」など。

ラクダレースについては、「アラビアの伝統文化であり、持ち主の名誉がかかる。かつては名誉をかけて行われたラクダレースには、1980年代半ばぐらいからビジネスとしての意味合いが加わってきた。石油収入によって潤う湾岸諸国の王族や金持ちたちがレースに勝ったラクダを高く買うようになり、各地のラクダレースはより速いラクダを探し出す場ともなっている。ラクダ1頭に数千万円もの値がつくこともある。中には、1シーズンに一人で5頭のラクダを売って450000オマーン・リアル（約1億35百万円）稼いだベドウィンのラクダ・オーナーもいる。こうして、ラクダの飼育はベドウィンにとっては一大産業となった。また、レースは観光的な意味合いも持つようになっている」。

レースそのものの内容については、「ラクダのスピードは時速約40キロ、距離はラクダの年齢に応じて、2歳は2キロ、3歳は3キロ、4歳は4キロなどと決められる。さらに5キロや6キロのレースもある。時には、20キロ程度のマラソンレースも催される」、「レース場には観客席のあるものから、村に行けば砂漠の中に柵があるだけのものもある」、「競馬と違うのは、騎手にアドバイスや応援をするために、関係者がピックアップトラックに乗ってラクダと一緒に外柵のまわりを走ることである」、「1日に何レースも行われる。雄と雌はそれぞれ別のレース。平均して、雌ラクダの方が速く走れる」。

レースのシーズンについては、「10月ごろから4月ごろまで（ラクダショーの方は5月にも行われている）」。主要なレースは、内務省が主催する11月18日のナショナルデー記念レースやディワーン（国王府）主催のバルカでのレース。地元のシェイク（有力者）やワリー（知事）や、時にはUAEのシェイクがスポンサーとなってシャルキーヤ地方のムダイビー、バディーヤなどで毎年行われるレース」。

騎手については、「4歳から6歳ぐらいのオマーン人の男の子。ほとんどがラクダ所有者の家族かその親族。中には、女の子もいる。UAEではアフリカ辺りの子供も稼ぎに来ていと聞かすが、オマーンの場合はオマーンの子供が騎乗する。子供たちは小さな時から、父親や祖父などから騎乗の手ほどきを受ける。レース中、騎手は携帯無線電話機を身に付け、調教師からの指示を受けて走る」。

調教については、「6月から10月。食事は、最上質のデーツ、オマーンでは貴重な蜂蜜、アルファルファ、牛乳や牛のギー(Ghee)などを与える。生後12ヶ月ごろから、口にくわえさせてロープに慣らす、立つ・座る・静かにさせる訓練、歩く訓練、レース経験のあるラクダに引っ張られて3、4キロ歩く訓練、ジョッキーを乗せて歩く訓練、車の前あるいは車の後ろについて走る訓練、ジョッキーを乗せて走る訓練などを行う」、「また、ラクダには調教師がいる。ムダイビー県でトップ調教師であるムバラク・ビン・サイド・アル・ワヘイビの場合は、100頭のラクダの面倒を見ているという。調教はラクダが1歳半ぐらいから行われ、それから各ラクダの能力が試される。その中で選ばれたほんの一握りのラクダが競争用の訓練を受ける。賞金については、「車、貴金属などとともに、賞金が一位から三位までに授与される。なお、アラビアでは賭け事はご法度なので、レースに賭けることはない」。

アラビア半島での競争用ラクダの産地については、「オマーンの主要な産地はバーティナ地方とシャルキーヤ地方であるが、バーティナ地方のラクダが一番とされている。優秀なラクダを得るには、雄・雌ともよいラクダであるのに越したことはないが、少なくともよい雄を選ぶこととされている。オマーン産のラクダがよいとされる理由は、オマーンが昔から血統を重んじ、交配に優れた雄を使ってきたからである。UAEなどでは、以前はスーダンやパキスタンのラクダと交配させていたという。また、オマーンのベドウィンたちが、ラクダを家族かそれ以上に丁寧に扱ってきたことも挙げられる」。

その他、調教施設・病院、人工受精についても、私の知っている限りの情報を提供した。

難問であった現地で協力してくれる人については、私がエクセター大学に在籍中に参加した1998年4月のドバイでのセミナーで知り合ったオマーン人学者から聞いていた彼の息子夫婦を紹介した。息子が役所を辞めて観光会社を設立し、ワヒバ砂漠の中にキャンプを建てていると仄聞したからである。

さらに、当時スルタン・カブース大に籍をおいてオマーンでフィールド調査を行っていた日本人大学院生の大川にも手伝ってもらうことにした。あとは、撮影の許可を出すオマーン情報省の既知のイギリス人の女性担当官、それに、現地でトラブルが発生した時には相談に乗ってもらうように、親しいオマーン人の要人も紹介した。加えて、在日オマーン大使への表敬などもアレンジした。

その後、今村ディレクターから全体構成素案の提示があった。これについてもオマーンの呼び方（オマーン国かオマーン・スルターン国か）、人口やベドウィンの数、砂漠での温度や動植物、ラクダのこぶ、ラクダの起源などなど細かくチェックをし、丁寧にコメントさせてもらった。

オマーンについては、マスカットの近代的な町並みを必ず紹介すること、オールド・マスカット、とくに旧道の上から見たオールド・マスカットと同港のヨットハーバー入口から見るミラニ、ジャラリ両砦の幻想的な夜景を、マトラの街並み、カンタブ周辺、クルムの丘からの市内の眺め、ラス・アル・ハムラからの市内の眺望、近くの砂のゴルフ場、グランドモスク、日本庭園などテレビで紹介してもらいたい撮影対象についても推薦した。

レースに参加する人々、ベドウィンの暮らし、この番組の主演となるベドウィンのサイード父子のラクダレースに向けての厳しい訓練、サイード自慢のスーパーラクダ、断食月のこと、断食明けの祭りであるイード・アル・フィットル、ラクダシーズンの到来、サイード親子のライバルであるオマーンNo.1トレーナのムハンマド、富豪などに高く売りつけるべく優秀なラクダを探し求めて動き回るバイヤーたち、ベドウィンの誇りであるラクダにまつわる伝説、民話や歌、名ラクダの生産は国家事業でありそのための王立ラクダ研究所、サイードやムハンマドが参加したラクダレースの結果、エンディングのラクダ競争に参加したラクダを売り、新たなラクダを育てるサイード親子の姿などの各構成要素にもコメントをした。

また、以下の注意点も付け加えた。

オマーンでは「物事が予定通り進まない」ということがまま起こる。文化の違いなので、決してイライラしないこと、撮影には十分な予備日を取っておくべきこと、ラクダレースの騎手について児童虐待であるとの声がでないよう注意すること、オマーンでは私が紹介した要人には必ずあいさつをしておくことなどなど。

翌2002年の2月中旬から、準備万端を整えた今村ディレクターとカメラマンの二人がオマーン入りし、私が紹介したオマーン人と日本人の奥様が同行して撮影が始った。場所は、ワヒバ砂漠、バルカのラクダレース場、マスカットの市内。空撮も行われた。「撮影が予定通り進まない。どうしたらよいものか」と砂漠の中から2回ほど電話をもらった。案じていた通りであったが、「忍耐強く進めるように」とその都度アドバイスをした。

難航した現地での撮影も無事終わり、今村から「2002年3月から4月にかけて札幌で編集する時にアラビア語から日本語への翻訳作業を行う。手助けをしてくれる人を紹介して欲しい」との依頼があり、すでにオマーンでの研究を終えて帰国していただくの大学院生の大川と在日オマーン人留学生をNHK札幌放送局に派遣した。

そして、2002年5月25日にNHKの『地球に好奇心』というシリーズの中で「熱砂のラクダレースーオマーン・ベドウィン父子の挑戦」というタイトルで番組が放映された。砂漠の中での厳しい訓練の取材を続けた主役のサイド父子のラクダが有名なバルカのレースで2位に入った。出来過ぎの結末となり、番組はしまったものになった。私も大満足した。

なお、このレースの優勝を勝ち取ったのは、オマーン No.1 のトレーナのムハンマドが所有していたラグゼルという名のラクダ。大臣から賞金と乗用車が贈られたとのことであった。

12-3. 「9. 11」同時多発テロとアフガン戦争 - 最新技術を手にしたアラブの若者

それは映画のワンシーンを見ているような光景であった。ビルの側面に吸い込まれるように突っ込む大型航空機、穴が開き火柱を上げる高層ビル、ビルと空一面を覆うもくもくと上がる黒煙、ゆっくりと崩壊する二つの高層ビルと画面いっぱいにも猛然と押し寄せる砂塵。逃げ惑う人びと、クローズアップされた恐怖でひきつった人びとの顔。

これが、2001年9月11日午前8時46分と9時3分に実行された世界有数の高層ビル、ニューヨーク世界貿易センタービルのノースタワーとサウスタワーへのテロ攻撃の映像であった。このビルは、私が還暦記念にオマーンから日本への年次休暇の帰路に家内と訪れた思い出の場所でもあった。それが目の前で崩壊している。テレビ画面に繰り返し流される映像は、この世のものとは信じ難いものであった。

人的被害は、日本人24人を含む2977人が死亡、25000人以上が負傷。インフラ被害・物的損失は、少なくとも100億ドル、それに長期にわたる健康被害が発生した

これより少し後の午前10時には、首都ワシントン近郊にある米国が世界最高の防衛体制を誇っていた国防総省のペンタゴンにも民間航空機が突入し、多数の死傷者を出す大惨事を惹き起こした。さらに、午前10時過ぎには、同じく民間航空機が米大統領専用山荘であるキャンプデービッドの北に墜落し、米国大統領が狙われていたこともその後判明した。

犯人については、当初アラブ首長国連邦のテレビ局にパレスチナ解放民主戦線（DFLP）が犯行声明を出し、日本赤軍の仕業かという報道も流れたが、米捜査当局はすぐにサウジアラビア出身のウサマ・ビン・ラーディンが関与しているとの見方を強めて捜査に入った。

このテロ攻撃は、民間航空機を爆弾代わりに使った自爆攻撃による誰も想像し得なかったものであった。世界貿易センタービルに突っ込んだ二機はボストン発のアメリカン航空とユナイテッド航空機、国防総省に突っ込んだのはダラス発のアメリカン航空機、そしてキャンプデービッドの北に墜落したのはニューヨーク発のユナイテッド航空機であった。

犯人たちはこれらの航空機をハイジャックし、自ら操縦して、各々の攻撃目標に突入したのだった（一機は失敗したが）。その時、航空機の位置が確認されないように、犯人たちによって航空機に装備されていた自動信号応答機のスイッチは切られていたという。

やがて、このテロ攻撃がビン・ラーディン率いる反米・原理主義の国際イスラームネットワークのアルカーイダの仕業だと確認され、実行犯たちはドイツに留学し、米国で航空機の操縦を習得したUAE出身者やサウジアラビア人だと判明した。

「テロは許してはならない」というのは大前提。だが、それとは別に、その時に、私は「よくまあ、あのアラブの若者たちがここまで来たものだ」と強く感じた。

私が中東と関わるようになったのは、1973年。私は最初にテヘランに長期出張を命じられた。テヘランから帰国してまもなく第一次石油危機が発生した。翌年の1974年に私はバイルート長期駐在を命ぜられ、翌年には丸善石油中東駐在所の初代所長としてバイルートに赴任した。この間私はバイルートをベースに、石油を求めて主にアラビア半島一帯を駆けめぐった。当時のアラビア湾岸諸国には巨額のオイル・マネーが流入し始め、各国が近代化の道を歩み始めたばかりのころであった。

当時のアラビアの子供たちではまだ裸足の者もいた。学校教育も緒についたばかりで校舎が足りず、午前と午後の二部授業が普通であった。サッカーもまだ知られておらず、サッカーボールを蹴る少年の姿などは皆無であった。サッカーどころか自転車に乗る子供もいなかった。われわれが砂漠で野球をしていると、アブダビの子供たちは、珍しげに恐る恐る近寄ってきていた。そんな状態であった。

そのような中で育った子供たちが欧米の工学系の大学で学び、自ら航空機の操縦技術を学んで、それまで日本の赤軍派やPLO（パレスチナ解放機構）が得意としてきた航空機のハイジャックやイスラーム原理主義過激派が繰り返してきた自爆テロを民間航空機を爆弾代わりに使って米国に仕掛け、世界をあっといわせたのである。しかも、当局の厳重

な警戒の網をかいくぐりながら、国際的なネットワークを密に張りめぐらしてのことであった。「アラブの若者たちもこんなことができるようになったのか」というのが、長年アラブの若者を見てきた私がまず感じたことであった。私はテロを肯定しているわけではない。ことは、再度断っておく。

このテロを仕掛けたビン・ラーディンは、サウジアラビア随一のゼネコン創業者の家に生まれた。初等・中等教育でイスラームの宗教教育を受け、キング・アブドゥル・アジーズ大学ではもっぱら宗教活動に浸っていたという。1979年のソ連のアフガニスタン侵攻で、イスラーム教徒が迫害されたことに義憤を感じた彼は、1982年にはパキスタンに向かった。人々をリクルートしたり建設機械などを持ち込んで、1984年にアフガニスタンへのイスラーム教徒の義勇兵の宿泊設備を作り、その後トレーニングセンターを建設した。これが、1988年のアラブ・アフガンズと呼ばれた義勇兵によるアルカーイダの創設につながった。

1990年8月のイラクのクウェート侵攻によって、湾岸戦争が勃発。欧米が多国籍軍を組織してイラクで同胞のイスラーム教徒を傷つけていること、サウジアラビアの聖地マッカやマディーナへの米国軍の駐留を当時サウジアラビアに戻っていたビン・ラーディンは憤り、サウジアラビアの王制や米国に強く反発した。1991年には、サウジアラビア王家によって国外追放されてアフガニスタンで亡命生活を送ったが、翌年からスーダンに移り、イエメンやニューヨークなどで国際テロ事件を起こした。1996年にはスーダンを追われ、アフガニスタンに移住。そこで、ビン・ラーディンはタリバン政権の保護を受けながら活動をし、1996年には米国に対して「ジハード」を宣言した。資金は、世界各地のアルカーイダの思想に共鳴するイスラーム教徒からの寄付や、外国人の誘拐などで得た身代金などでまかかった。

アルカーイダは統一した組織ではないが、各地にネットワークを築き、勢力を拡大していった。イエメンの「アラビア半島のアルカーイダ」、アルジェリアの「イスラーム・マグレブ諸国のアルカーイダ」などが結成されて繋がっていったのである。

9. 11同時多発テロに遭遇したジョージ・W・ブッシュ大統領は、9月20日に「テロに屈しない」との声明を発表するとともに、当時アフガニスタンの支配勢力であったイスラーム神学生を中心としたタリバンに、このテロに関与したとしてビン・ラーディンを含む全てのアルカーイダ指導者を引き渡すよう要求する最後通牒を突き付けた。

タリバン政権がこれを拒否し、10月7日に米国、イギリス、NATOなどの有志連合は、「不朽の自由作戦」の名の下でアフガニスタンへの空爆を開始した。アフガニスタン紛争の始まりであった。この紛争では、空からの攻撃やミサイル攻撃などを有志連合が行い、地上軍はアフガニスタンの北部同盟（アフガニスタン救国・民族イスラーム統一戦線）が主体を担った。11月には首都カブールが北部同盟によって制圧され、タリバン政権は崩壊した。

12月22日にアフガニスタン暫定行政機構の議長に就任したハーミド・カルザイが大

統領となり、2004年1月には憲法が成立し、10月にアフガニスタン・イスラーム共和国が発足した。

9.11同時多発テロ当時、タリバンの庇護を受けながらアフガニスタンでアルカーイダをベースに世界規模でのジハード活動を展開していたビン・ラーディンは、9月16日には「9.11」との関連を否定していたが、後年の2004年10月にアルジャジーラを通じて発表したビデオ声明で自らが同時多発テロ事件に関与したこと、自分が19人の実行犯に攻撃を指示したことを認めた。

そのビン・ラーディンは2011年5月11日にバラク・オバマ大統領の命を受けた米海軍特殊部隊によって、パキスタンで殺害された。

12-4. イラク戦争 - サダム・フセインの死

米国は、1880年から1988年のイラン・イラク戦争ではイラクを支援した。1990年4月にサダム・フセイン大統領が軍幹部を前にして「イスラエルがイラクを攻撃するなら、化学兵器を用いてイスラエルの半分を壊滅させる」と演説したのにはひどく刺激を受けたものの、米国は中東での抑止力としての位置づけからイラクとはまだ良好な関係にあった。しかし、同年8月のイラクのクウェート侵攻によって、米国は一転して反イラクとなった。

既述の通り、米国はイラクのクウェート侵攻の数時間後には国連安全保障委員会を開催し、イラク軍の即時・無条件撤退を決議し、6日にはイラクに対する経済制裁、26日には海上封鎖の実施などを決議した。

イラクが国連の度重なる撤退勧告を無視してクウェートの占領を継続したため、11月29日に国連安全保障委員会は「武力容認」を決議、その下で翌1991年1月17日には、アメリカのジョージ・ブッシュ大統領の呼びかけによって編成された「多国籍軍」がイラクへの空爆を開始した。湾岸戦争の勃発であった。

多国籍軍は2月23日は陸上の戦闘に踏み切り、同27日にはクウェート市を解放し、さらにイラク領深く進攻した。3月3日にイラクが停戦協定に調印して、戦争は終わった。

湾岸戦争後の同年4月3日の国連安全保障理事会決議687にある「大量破壊兵器のすべての廃棄」に関する査察をイラクは拒否し、国連に加盟している国々の中に「イラクは核ミサイルや化学兵器を持っているのではないか」との疑念が生じた。

2001年に9.11同時多発テロが発生すると、アメリカはアルカーイダとイラク政府がつながっていると考えるようになった。ブッシュ大統領は2002年1月の一般教書演説で、同じく大量破壊兵器保有とテロ支援を疑われていたイラン、北朝鮮、イラクを「悪の枢軸」として批判した。とくにイラクに対しては、大量破壊兵器拡散の危険を重視し、2002年に入って政府関連施設などの査察を繰り返し要求した。2002年11月、イラクに武装解除を遵守する「最後の機会」を与えるべく、国連では国連安全保障理事会決

議1441が採択され、イラクは国連監視検証査察委員会の受け入れを容認して全面査察に応じた。1998年以来4年ぶりのことであった。

12月に、イラクは膨大な量の申告書を提出した。査察結果をまとめた翌年1月の査察委員会の中間報告で、イラクの大量破壊兵器保有の決定的な証拠は発見されていなかったものの、イラクが査察に非協力的だったことが明らかになり、イラクの申告書には「矛盾」があるとされた。

3月に査察委員会は、第2回目の中間報告を行った。米国は査察が不十分であるとして、イラク攻撃に関する国連安全保障理事会決議採択を行おうとしたが、失敗。米国と英国は、国連安全保障理事会の決議なしでの攻撃に踏み切ることにした。3月17日、ブッシュ大統領は全米向けテレビ演説を行い、イラクに対して全面攻撃の最後通告をした。

一方、フセイン大統領は自国向けの演説では徹底抗戦を主張していたが、ブッシュ大統領宛てに「米政府が政権の交代を求めなければ、あらゆる要求に対して完全に協力する用意がある」という書簡を送ったが、アメリカ側はこの受取りを拒否した。

かくして、予告どおり3月30日に「イラクの自由作戦」と命名した作戦の下で、米国が主体となり、イギリス・オーストラリア・ポーランドと共にイラクへの侵攻を開始した。

白煙を上げて発射されるトマホークミサイル、出撃するステルス攻撃機、イラク南部から進撃する戦車群、爆音とけたたましいサイレンの音が鳴り響くバグダードの街、攻撃を受けて燃え上がり広く煙に覆われるバグダードの夜空、炎上する大統領官邸、出撃するB52戦略爆撃機などが自宅のテレビに連続的に映し出され、息を飲みながら見た記憶がある。

4月6日には南部のバスラが陥落し、開戦後21日目の同9日には、バグダードが制圧された。翌10日には、米軍や市民によってバグダード市内中心部のフィールドウス広場にあった巨大なサダム・フセインの銅像の首に縄がかけられ、それが米軍車両に引き倒されると、集まった多数の市民が歓声を上げる映像もテレビに映し出された。それが、フセイン体制崩壊の象徴であった。

その後、米軍はモースル、次にアンバール県とほぼ1ヶ月間でイラク全土を制圧し、5月1日にブッシュ大統領が、「大規模戦闘終結宣言」（終戦宣言ではない）を発表した。同22日に採択された国連安全保障理事会決議1483に基づき、アメリカ軍、ポーランド軍、イギリス軍によるイラク統治が開始され、スペイン、オランダや東欧諸国などの参戦国が県別に配置された。

7月には、イラク人による暫定統治を行うイラク統治評議会が発足した。フセイン大統領は、この年12月31日にイラク中部のダウルで拘束され、アメリカ軍の収容施設「キャンプ・クロッパー」に拘置された。2006年11月にサダムはイラク中部ドゥジャイルのイスラーム教シーア派住民148人を殺害した「人道に対する罪」によって死刑判決を言い渡され、2006年12月30日に処刑された。

ブッシュ大統領が掲げたイラク戦争の開戦理由は3つあった。

第一がフセイン政権は大量破壊兵器を保持しておりその脅威を取り除く、第2がフセイン政権がアルカーイダのテロリストと協力関係にある、第3がイラク国民をフセインの圧政から解放してイラクに民主政権を樹立するというものであった。

大量破壊兵器については、2004年10月にアメリカが派遣したイラク調査団が、「開戦時イラクに大量破壊兵器は存在しなかった」とする最終報告を米議会上院軍事委員会の公聴会に提出したことによって、その存在は否定された。フセインとアルカーイダとのつながりについても、アメリカで上院やペンタゴンへのものなどいくつもの報告書が作成されたが、両者のつながりは発見されていない。また、民主政権の確立は、絵にかいた餅であった。その後イラクの政治は混迷を極め、イスラーム国の誕生を生むまでになった。

なお、ブッシュ大統領の大規模戦闘終結宣言後も、イラク国内の治安悪化が問題となり、戦闘は続行した。2010年8月31日に、バラク・オバマ米大統領により改めて「戦闘終結宣言」と『イラクの自由作戦』の終了が宣言され、翌日から米軍撤退後のイラク単独での治安維持に向けた『新しい夜明け作戦』が始まった。そして2011年12月14日、米軍の完全撤収によってオバマが、イラク戦争の終結を正式に宣言した

12-5. ドクター・エンドー英国中東学会にて

私は、2003年7月12日（土）から15日（火）までエクセター大学で開かれた英国中東学会（BRISMES）総会に出席した。1996年に同大学のアラビア湾岸研究所名誉研究員を務めて以来学会員となっていたので、久しぶりに日本から出かけた。当時イラクでは、イラク人による暫定統治を行うイラク統治評議会が発足して1年という状況で、イラクの先行きの見通しはまだ混沌としていた。

大学の寮に泊まり込んでの出席だったが、開始日の前日に受付で貰った資料の名簿を見ると、私は **Dr. Haruo Endo** として登録されていた。当日受付に行くと、担当のイギリス人女性に「私は **Dr.** ではなく、**Mr.** だ」と申し出たら、彼女から「あなたのお年なら、**Dr.** でいいんです」としごく簡単に言われた。「そうか、それでいいなら **Dr. Endo** で行こう」と腹を決め、この会議はドクター・エンドーで通すことにした。「あなたの年でドクターになっていないの？ いままで何をしていたの？」という意味もあったのかもしれない。少し後ろめたい気もしたが、ドクターの称号に悪い気はしなかった。

総会のテーマは「変革への教育の力」であった。このテーマでの中心的なイベントは、イスラエルやパレスチナの大学教授らによる「ムスリム・キリスト教・ユダヤ教の教科書比較」というシンポジウムであった。私にはとくに興味深いトピック。登壇した3人の教授たちは、お互いを認める融和的な発言を強調していたが、最後は「やはり自分の信じる神が一番」と言うので、会場のあちこちに苦笑が漏れた。これを聞いて、私は一神教の融和には限界があると強く思った。

時が時だけに「イラク問題」が会議では一番大きなテーマとなった。因みに、メインテーマが教育であったにも拘わらず、冒頭講演は「中東におけるアメリカの今」というものだった。何人もが登壇してのプレゼンに喧々譁々の議論が続いた。会場はこれ以上ないむんむんの熱気に包まれた。

その時の主にイラク人によるコメントは以下であった。

- ・米国は帝国主義的な国。その行動はやがて中国・北朝鮮にも及ぶだろう。
- ・米国は悪意に満ちた危険な国だ。
- ・米国はご都合主義。フセインを作り出し、彼を応援したのはアメリカではないか。
- ・米国のイラク侵攻の目的は、イスラエルの保護とシリアとイラン対策だ。
- ・大量破壊兵器などどこにもなかったではないか。
- ・民主主義は、王政の湾岸産油国では危険でさえある。
- ・米国が広島・長崎に原爆を落したのも、日本を敗戦に導くためではなく、米国の力を見せつけるためであった。今回の米国の行動もシリアやイランへの力の誇示が念頭にある。
- ・米国はイラクを完全支配下においている。
- ・米国は周到にイラクの通信・警察・軍を破壊した。
- ・どの会議にも常に米国が付きまとい、自由な発言はできない。
- ・米国はイラクを解放するために戦争をやってきたというが、過去2週間に7万人ものイラク人が殺されている。
- ・米国はインフラの整備をまだ完成していない。湾岸戦争時より遅い。
- ・イラク国民はフセインを支持していなかった。湾岸諸国も同じであった。
- ・現在のイラク人の抵抗は、米国からよい条件を引き出すためのものである。
- ・イラク人は日本の自衛隊たりととも米国に組するものとして殺すだろう。
- ・国連がコミットするまで日本は出ないほうがよい。
- ・イラクは3つの州の合衆国になればよい。スンニ派の州、シーア派の州、クルド人の州に。

米国に対して、批判的な見方が非常に多かったのが印象に残った会議であった。

また、混沌とするイラク情勢を踏まえて、イラクの政治体制についても多くの発表が行われたが、「イラクは3つの州の合衆国になればよい。スンニ派の州、シーア派の州、クルド人の州」という主張が印象的であった。

12-6. 日本での「乳香」展 - 「天年堂」の日オ交流への貢献

福岡県の久留米市で香料と香木を扱う「天年堂」の木下によって思いもかけなかった乳香を通じての日本とオマーンとの文化交流が進展した。

彼と出会ったのは、日本橋高島屋での乳香をメインにした香木と香炉展である。200

1年の5月ごろ、私有家内とたまたま二子玉川の高島屋を訪れた時に、家内から「乳香を売っている人がいたわよ」と告げられた。「それは珍しい。乳香はオマーンの特産品。見逃すわけにはいかない」と教えてもらった店に引き返してみると、「日本の伝統展」に参加して出店していた久留米の老舗「天年堂」の店頭以最上質のオマーンの乳香が展示されていた。日本で乳香を売っている人に会うのは、その時が初めて。私は感激のあまりオマーンのこと、乳香の樹が生育するサララ地方のことを店主に熱っぽく語った。その店主が木下であった。

それが縁で私は木下と知り合い、2002年のUNIDO（国際連合工業開発機関）のオマーン・UAE・クウェートへの投資ミッション（11-5参照）や、2004年のオマーンでのオ日親善協会設立30周年記念講演会（後述。12-7参照）にも同行してもらった。

みなさんは乳香をご存知だろうか。日本ではほとんど知られていないので、ここで乳香のことを説明しておく。

クリスマスになると、キリストが誕生した時に、ベツレヘムの馬小屋を目指して馬上にまたがっている東方の3博士の絵をよく目にする。しかし、その3博士がお祝いとして持参した贈り物がなんであったかについて語られることはまずない。聖書のマタイによる福音書の第2章11節に「黄金、乳香、没薬などの贈り物をささげた」とある。東方の3博士がキリスト誕生の際に持参したお祝い品の一つが乳香であった。

この乳香はオマーン南部のドファール地方とイエメン、ソマリアに繁茂するカンラン科のある種の木に深く疵を付けるとしみ出てくる芳香性の樹脂である。樹高は3メートルから10メートル。ミルクがしたたり固まったような色と形をしているところからこの名が付いた。また、オマーン産の乳香が世界で一番上質と言われている。燃やすと優雅な甘い香りが漂う。

乳香は没薬とともに、神や天を祀る際の最上で不可欠な焚香料として、紀元前2000年以前から古代エジプトとメソポタミアなどで使用されていた。「神のもの、さらに神そのもの」とされ、その歴史は古い。シバの女王がイスラエルのソロモン王を訪ねた時（紀元前10世紀ごろ）のことが「香料と非常にたくさんの金と宝石とをラクダに負わせて」と旧約聖書の「列王記上」10章および「歴代志下」9章に書かれているが、この香料が乳香であったことは間違いないだろう。

乳香は南部ドファール地方から陸や海を通じて、東へ西へと世界中に運ばれた。アラビア半島というといまは石油が想起されるが、古代のアラビア半島南部は乳香の富によって栄え、この地方は「幸福のアラビア」として知られた。当時、乳香は金と同じ価値があったといわれている。

日本にはもともと香木がなく、香気があるとされていたのはせいぜい杉や檜などであった。香料は仏教の伝来とともに中国・朝鮮を通じて日本にもたらされた。中国は香料の産出国ではなく、香料は西域の陸上ルートやペルシャ・アラビアと中国南部をつなぐ海など

を通じて中国にもたらされ、それが遣唐使や僧などによって日本にも伝えられた。その一つとして乳香があった。奈良・平安時代にはすでに日本にも入っている。そして、その後は香料としてだけではなく、薬としても使用されてきている。

江戸時代から続く老舗「天年堂」は、白檀や沈香から製造した高級な香・線香を中心に乳香や乳香配合のお香も一部販売してきてはいたが、木下にとっては知られざる国であったオマーンへのUNIDUの視察旅行を経験したことで、乳香への関心が高まり、その周知や販売により力を入れるようになった。

「天年堂」は、日本全国の百貨店が催す「日本の伝統展」、「九州の伝統物産展」などの常連である。その度に配られる百貨店のチラシの数は数十万部、数百万部にも及ぶ。木下は、そこには必ず「オマーン産乳香」という文字を刷り込んできている。私のようなオマーン最員の人間には誠にありがたい。

その木下が2003年1月22日から28日まで、日本橋高島屋で「西からの香り乳香の世界」という香木と香炉展を開催した。案内のチラシには、「世界の3大香木『西洋の乳香』『東洋の沈香・伽羅』『インドの白檀』のうち、西洋の香り乳香と乳香を産する西アジアの楽園オマーン国を紹介します」とあった。

会場では、最高品質の乳香、特徴的な彩色を施された陶器製のオマーンの香炉、世界でもっとも高価といわれるオマーン産の香水「アムアージュ」、それにオマーン紹介のパネルなどが真ん中に展示され、周りに天年堂の沈香をはじめ麝香、白檀など世界各地の香料やそれらをもとにして製造された格調高い香りの線香の数々が飾られた。

開催中には駐日オマーン大使も駆けつけ、来場者は延べ数百人を超え、日本初めての乳香展は大盛況裡に終わった。大手化粧品会社の研究員、大学関係の研究者などの香りの専門家やママスコミ関係者なども集まった。

12-7. オ日親善協会設立30周年記念講演 - ヒト・モノ・文化の交流史

オマーンの近代化は、1970年7月23日の宮廷クーデターによる現カブース国王の即位に始まった。当時オマーンが直面した緊急の課題は、内政面の政治・行政機構の整備と国内の治安維持もさることながら、先王サイド国王の下でそれまで鎖国を続けてきたオマーンにとって各国から国家として認めてもらうことであった。

日本は1971年6月にオマーンを承認し、翌1972年5月に外交関係を樹立した。国交を樹立した翌年の1973年9月に、日本側では「日本・オマーン親善協会(Oman-Japan Friendship Society)」が設立され、オマーン側でも、1974年3月の勅令によって、「オマーン日本親善協会(Oman-Japan Friendship Association)」が設立されたことは既述した。

2004年はそのオマーン日本親善協会設立30周年に当たり、現地の日本大使館からそこでの記念講演を行えないかと私に打診があった。「市井の無名の者に何故こんな大役？」

という疑問もあったが、私はこれを引き受け、1月に「オマーン日本交流史」という演題の下にマスカット市で講演を行った。

講演内容は、「日本人がアラビア人を初めて見たのは、聖武天皇の天平勝宝5年（753年）。遣唐副使の大伴古麻呂がアラブ他諸外国の使節も出席した唐での正月の朝貢の席であったこと」、「今から六百年も昔に京都のど真中の三条烏丸に一人のアラビア人が住んでいた。その名をヒシリと言っていたこと」、「日本人で初めてオマーンを訪れたのはペトロ岐部」、さらに「明治13（1880年）に古川宣誉と、伊東祐享率いる軍艦「比叡」がマスカットを訪れていること」、「志賀重昂が大正13年（1924年）にマスカットを訪れ、スルタン・タイムールに謁見したこと。その縁でタイムールが退位後神戸に住むこととなり、日本人女性大川清子と結婚してブサイナ王女が生まれたこと」、さらにはそれ以後のヒトの交流史も述べた。

また、モノや文化の交流についても触れ、モノの交流については、明治以降の貿易から現在の石油・ガスの輸入、それに日本企業の進出やJICAによるオマーンへの貢献などにまで触れた。文化交流については、オマーンの「乳香」が奈良時代にはすでに日本に到達していたとみられること、「有平糖」とオマーンの銘菓「ハルワ」とのつながりの可能性なども述べた。

アラビアは「香り」の本場である。香りはアラビアの日常生活に欠かせないものである。中でも、オマーンは世界最高品質の「乳香」の産地である。そのため、九州久留米の江戸時代から4百年続く老舗香舗「天年堂」の木下取締役にも同行してもらい、「日本の香の歴史とオマーンの伝統との共通点」という演題で講義をお願いした。

講演会は、大盛況であった。オマーン側からはオマーン日本友好協会会長を務める国王顧問、スルタン・カブース大学長代理（学長は、国王）やオマーン歴史協会会長代理、日本側からは日本大使、それ以外にアメリカ大使、エジプト大使やその他大使、現地の有力者、著名人など総勢で150名を超える会場に入りきらないほどの出席者があった。

講演後には活発な質疑応答が続き、とくに木下の講演後の「練り香」の実演には大勢のオマーンや欧米のご婦人たちが集まり、最初の予定時間を1時間半も超過する講演会となった。

なお、日本大使館にはこの講演会の予算がなく、国際交流基金に旅費の申請をするように言われ、そこから一人分の航空運賃だけの補助をもらい、それで木下と二人分の格安航空券を購入して行った覚えがある。宿泊費は自分たち持ち、講演料はゼロであったが、それでもそういう機会を得て満足の講演会であった。

12-8. ザーイド大統領 - UAE 建国の父

毎朝日本の全国紙6紙とオマーンの英字新聞4紙をネットで読むのが私の1日の始まり

である。もう20年以上続いている。

2004年11月3日の朝、いつものように新聞を検索していると、「ザードUAE大統領死去」という記事が目に入った。私自身は大統領に会う機会がなかったが、私には身近に感じられる人であった。

1975年から1976年までと1977年から1979年のアブダビ駐在時の大統領で、個人的には1974年にアブダビ石油で知り合ったベドウィン族長のムハンマドじいさんの幼馴染であったこと。また、丸善石油の上司の杉本茂がアブダビの石油利権契約を締結した相手でもあり、日本人で一番多くザードに会った丸善石油からアブダビ石油へ出向した会社の後輩2人や大統領来日の際に通訳を務めた大学と会社の後輩の女性から、大統領についてのナマの情報を聞いていたからである。

私には、「アラブの偉大な指導者がいなくなった」、「一つの時代が終わった」という衝撃が走った。ここで、近代アブダビを創り上げ、UAE建国の父と唄われるザード・ビン・スルターン・アル・ナヒヤーン大統領に触れておきたい。

ザードは1918年に、アブダビから東160キロ離れたオマーンとの国境にあるオアシスの町アル・アインで、第8代アブダビ首長のスルターン・ビン・ザードの四男として生まれた。子供の頃、学校教育を受けることはなかったが、イスラームの基礎的な教育を受け、読み書きを学んだ。生来の鋭い観察力と記憶力で、個人的な経験や他人との交流を通じて学校では学べない多くのことを学んだ。父が暗殺された後、預けられたマンシール部族の他部族への襲撃に加わったり、砂漠での狩りをしながらベドウィンの生き方を体験した。

魅力的な人物で、強靱で勇気があり、ライフル銃を持って白馬を乗りこなし、人の話をよく聞くザードの周辺には人が多く集まったという。ムハンマドじいさんが私に「ザード大統領は、力が強かった。コインさえも押し曲げられた」と語ってくれたのは、この頃のことだろうか。公平で寛大な人としてその名は広く知られていたという。

生まれてから大半を砂漠で過ごしていたザードは、時々海岸べりのアブダビの町にも出て、1928年に第10代のアブダビ首長となっていた兄のシャクブートが住むホスン城で、部族長たちの話を聞く機会がしばしばあった。多くの部族長と接する中で、部族政治のスタイルや伝統を身につけて行ったという。

1946年にザードは東部地区の知事に任命され、灌漑設備の整備、農業の振興や道路建設などの事業にあたり、部族間の争いの解決にも力を尽くした。

1958年に発見されその輸出が1962年から始まった石油によってアブダビに莫大な収入が入るようになると、その使い道をめぐって支配家内で対立が起こった。ザードの「石油収入はアブダビの発展のために使われるべきだ」という考えに対し、シャクブートは「不測の事態で現金が必要となる時のために蓄えておかねばならない」という考え方に固執した。広く旅行して世の中を観察し、あらゆる階層の人に会っていたザードは、国のインフラストラクチャーを整備し、国民を教育することが必要であると考えていた。

1960年代初期から中期にかけて、自分自身が首長ではないザイドには「なんとかしなければ」との思いが強まっていった。一方、アブダビの人々や有力な部族長たち、イギリス政府の代表、石油会社、銀行筋などからの「行動を起こすべき」との圧力も感じていった。そして、彼の考え方に賛同する他の兄弟や従兄弟と味方する部族を結集し、英国の支援も得て、1966年8月6日に兄シャクブートを放逐して、ザイドは第11代のアブダビ首長に就任した。

ザイドが権限を掌握してまず行ったことは、シャクブートが貯め込んで城にあったお金を、全部人々に分け与えたことであった。善意と気前のよさに溢れた信じられないような施策であった。

国造りは、まったくゼロからの出発。まずは、政府組織と行政機関を整備することであった。何の知識もない砂漠育ちのザイドは外国の専門家の力を借りながら、水道、電気、財政、都市計画、警察、防衛、通信、内務、外務、儀典、保健、教育、司法などの組織を自分で判断しながら造り上げていった。

町造りや電気、水道などのインフラストラクチャー関連のプロジェクトも遂行した。ザイド大統領の土木技術アドバイザーとしてアブダビ政庁で活躍した日本人建築家の高橋克彦がアブダビの都市計画マスタープランを作成したのもこのころのことであった。

1968年1月に英国は、財政的及び政治的な理由で、アブダビとその周辺の首長国を含むスエズ以東の全領土から撤退することを表明した。これは、1852年以来外部からの侵略者に対して、沿岸地域を防衛していた傘がなくなることを意味した。ザイドは、周辺諸国との連合を提案した。交渉すべき相手は、これまでアブダビと争ってきた人々で、昔からある部族間の対立構造から、彼らを説得するのは至難の業であった。

ザイドは決して諦めずに、車で近隣首長国のみならず飛行機でカタールやバーレーンまで出かけて、説得に当たった。英国が撤退を発表して1ヶ月もたたないうちに、ドバイのラシド・ビン・サイドの合意をとりつけ、その2週間後に他の5つの近隣首長国とカタールとバーレーンの首長との原則的な合意を取り付けた。そして、1971年12月2日に、カタール、バーレーンを除く近隣7首長国でアラブ首長国連邦（UAE）を誕生させ、ザイドが初代大統領に選出された。

連邦もアブダビの国造りと同様に、内政・外交ともにゼロからの出発だった。最初に手をつけたのは、政府と行政組織の整備。しかし、形が整っても、数百年に亘り砂漠の部族的な生活をしてきた人たちに国やその指導者を認めてもらうこと、それに、自らをUAEの国民として認識してもらうことは難しいことだった。また、外国や国際組織から承認してもらうことも容易なことではなかった。あった。ザイドに何十回もあった丸善石油の後輩から聞いた、「ザイドは、UAE大統領になってから『国際連合って何？』と質問した」という話もこのころのことであろう。

内政・外交ともに、それを担う人材の不足がもう一つの難問であった。それらを克服しながら、ザイドはUAEを造り上げたのである。まさに、「建国の父」と呼ばれるにふ

さわしい業績であった。

1970年代に私は2度のアブダビ駐在を経験したが、国と言っても、軍隊は首長国ごとに所有し、車両のナンバーなども別々だった。1978年のことだったと記憶するが、「アブダビとドバイがお互い国境に軍隊を配置、一発触発の状態」とのうわさも聞いたことがあり、当時は「UAEが国としてまとまれるのかな」とも感じていた。

ザーイドは、UAE内のすべての開発プロジェクトを進めたが、とくに農業と緑化プロジェクトには力を注いだ。私が駐在していた当時によく車で走ったアブダビ・ドバイ道路沿いに苗木を植え、その下に敷いた細いゴムの管で水をやっている現場をたびたび目撃した。

そのたびに、「こんな気候の土地で緑化など無理だろう」と思っていたが、既述したようにいまはこの道路沿いに高い樹木が「これ、マレーシア？アブダビではないよね」と思うぐらい立派に育って周辺の砂漠の景色が見えない様を目にすると、ザーイド大統領の慧眼とその努力には脱帽である。

ザーイドは、亡くなる2004年11月2日まで30年以上に亘ってUAE大統領を務め、11月3日にアブダビの皇太子であった長男のハリーファ・ビン・ザーイドが第2代UAE大統領兼アブダビ首長に就任した。そのハリーファも2022年5月13日に亡くなり、ザーイドの3男のムハンマド・ビン・ザーイドが第3代UAE大統領兼アブダビ首長に就任している。

主な参考文献：

「ラクダの文化史」（堀内勝、リポレポート、1986年）

「ボロをまとった暮らしから一世代で裕福に」（ムハンマド・アル・ファヒーム著、井上信一訳、ロンドン・センター・オブ・アラブ・スタディーズ・リミテッド、1997年）

「ホメーニーからビン・ラーディンへ」、（小山茂樹、第三書館、2011年）